

I 学校の概要

学習意欲向上モデル校事業

高松市立協和中学校

◆児童数及び教員数

○児童数

第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	特別支援	全校
7学級 220名	7学級 211名	6学級 206名	学級 名	学級 名	学級 名	3学級 9名	23学級 646名

○教員数 44名

◆学校の特色

本校は、環境的な要因に様々な負荷を背負っている生徒が少なくない。全国、県の学力学習状況調査の質問紙における回答において、自尊感情や自己肯定感にかかわる値が低いことや、学習意欲や学力の2極化に、生活環境が影響していることは否めない。また、進路保障においても大きな課題がある。

これらの課題を克服するため、本校ではかつてより、人権教育を基盤に据え、互いに支え合う中で、自ら道を切り拓く力の育成をめざす、「なかまづくり」を中心とした教育活動を行ってきた。この取組により、学校の雰囲気は落ち着いてきているものの、すべての生徒の進路を保障するためにも生徒の「学びからの逃避」は、本校の学校課題として残っており、一人一人の生徒が、夢や希望のもてる進路を保障していくために、さらにもう一步進んだ取組の必要性を感じている。

II 研究主題等

研究主題

みんながもれなく「学び合う」授業づくり —協同学習による学習意欲の向上—

◆研究主題設定の理由

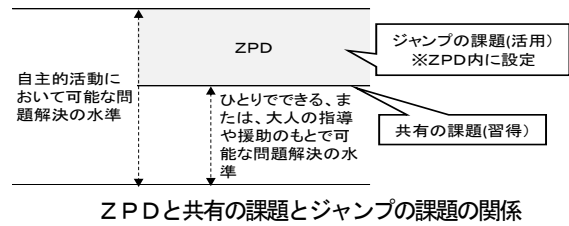
「学びから逃避」する生徒を学びの場にとどめ、すべての生徒の進路を保障することが本校の学校課題である。かかる課題の解決に向けて、生徒の学ぶ意欲を高め、課題のある生徒もともに学び合える主体的で対話的な授業への改善に取り組んでいる。主体的で対話的な授業を行うためには、すべての生徒がわかる喜びを味わうとともに生徒同士が対話を通して、学ぶ意欲を高め合うことが必要であると考え。そこで、「生徒同士の学び合いを重視した対話型の授業形態と二段階方式の学習課題による授業構成を基本とした授業を行うことで、生徒の学ぶ意欲を喚起・持続・向上させ、これまで学びからの逃避の状態にあった生徒も、学力上位層の生徒も、ともに学び合うことができるのではないか」という仮説を立て、かかる研究主題を設定した。

◆研究内容及び方法

昨年度、本校では、同研究主題のもと授業改善（①質の高い学習課題の考察及びその結果の蓄積、②「学び合う関係性」を重視した授業の環境や教師の配慮事項の研究及び実践、③効果的な授業の振り返りの方法の研究及び実践）と家庭学習のあり方についての研究及び実践を行った。本年度は、これらの研究の結果を踏まえ、さらに深化・発展させることを目的として、次のことに重点をおいて研究を進める。

(1) 学び合う意欲を高める授業デザインの工夫

本校では、協同学習において、レフ・ヴィゴツキーの発達の最近接領域の理論をもとに、「教科書の内容が理解できる」課題（以下「共有の課題（習得）」）と発達の最近接領域（ZPD）内に「教科書で得た知識をもとにさらに活用できる」課題（以下「ジャンプの課題（活用）」）の2段階の課題（右図参照）を1時間の授業の中で設定した授業研究を行っている。本年度は、この協同学習にもとづく「学び合いの促進」について年間を通して研究を行う。



ZPDと共有の課題とジャンプの課題の関係

（活用）」の2段階の課題（右図参照）を1時間の授業の中で設定した授業研究を行っている。本年度は、この協同学習にもとづく「学び合いの促進」について年間を通して研究を行う。

① 基礎概念を習得できるジャンプの課題（活用）づくり

昨年度の研究で、生徒の学習への取組がとても充実したジャンプの課題（活用）は、熟練した教員でも年間で1つか2つであった。このことから、ジャンプの課題（活用）については、課題の設定が難しいとともに、生徒の思考の流れや理解の深さによって、同じ課題であっても効果が変化する。

今年度は、1つの授業に1つのジャンプの課題（活用）を用意するのではなく、生徒の学びの状態によって変えられるようジャンプの課題（活用）を授業の到達段階に合わせて複数用意することによって、効果のある授業の回数を増やす手だてにつながるかどうかを実践により検証する。

② 学習意欲をさらに高め、深い学びへとつながるジャンプの課題（活用）づくり

二段構えの学習課題は、共有の課題（習得）とジャンプの課題（活用）の相互の関連性が、学習意欲の喚起・継続のために非常に大きな要因になると考えられる。また、ジャンプの課題（活用）を設定することで「深い学び」へとつながっていく。「深い学び」へのつながりを重視したジャンプの課題設定について実践を通して研究し、どのような課題設定が有効であるかを検証していく。

③ コの字型の座席配置が生きる授業展開の工夫

本校では、同研究主題のもと、研究を進めるうえで、基本の座席配置をコの字型にしている。このことにより、グループ学習での座席の転換もスムーズになり、話し合い学習の活性化が図れている。しかし、コの字型の座席配置は、教師の方に体が向きにくい、板書が見づらい、書きづらい等のデメリットもあり、基礎・基本の定着を重視した学習内容や板書をもとに学習をすすめていく内容ではコの字型やグループの座席配置より、一般にスクール形式と呼ばれる座席配置の方が適している。このコの字型の座席配置のデメリットを克服するためにも、コの字型の座席配置が十分に生きる授業展開の工夫が重要であると考え。そこで、コの字型の座席配置が生きる授業展開の実践研究を行い、有効性を検証していく。

(2) 授業改善を教師自らが積極的に行うための意欲と資質の向上をめざした研修のあり方

教師自らが授業改善を意識し、日々の実践を行わなければ、研究は実態にそぐわないものにしかならない。そこで、教師の意欲と資質の向上を目的とし、次の4種類の研修を実施し、その効果をもとに、授業改善を続ける教員の意欲や資質を向上させる研修のあり方を考察する。

- A【学校課題研修】～ なぜ、本校生徒にとって進路保障が重要なのか等、学校課題を理解する研修
- B【スタートアップ研修】～ 協同学習の基本を学ぶ導入研修で、共通実践の内容を申し合わせる研修
- C【生徒理解研修】～ 生徒がどのような課題をもっているのか等、個々の生徒の現状を知る研修
- D【公開授業研修】～ 全員、年4回、授業公開や相互参観を実施し、授業力の向上を図る研修

(3) 協同的な学びを念頭に置いた家庭学習のあり方

昨年度から開発に取り組んでいる学習の手引きの作成に加え、どのような家庭学習のあり方が協同的な学びにおいて必要かを生徒の実態を踏まえながら、啓発を行い、より効果的な家庭学習の進め方、家庭学習の内容、家庭学習を継続させる課題のあり方等を検証する。

Ⅲ 研究実践

◆学び合う意欲を高める授業デザインの工夫

1 (生徒質問紙) ジャンプの課題が設定されていますか。

指標 「①はい+②どちらかと言えばはい」の合計



指標の達成に向けた実践

基礎概念を習得できるジャンプの課題（活用）づくり

協同学習を行って6年目となるが、例年、効果的なジャンプの課題（活用）が生み出せない現状があり、本校の課題となっている。この原因の1つとして、教員の異動により、継続して取り組む教員の減少があげられる。

『「ジャンプの課題」はできる子にとって有意義であるだけでなく、できない子にとっても有意義である。なぜなら、できない子は「ジャンプの課題」においていっそう夢中になって学び、たとえジャンプの課題は達成できなくても、基礎的概念を習得している。』という原点に立ち戻り、ジャンプの課題（活用）に取り組むこととした。また、「学びの共同体」では、ジャンプの課題づくりを難しくしている要因として、次の5点の要因が絡み合っていると述べている。

- ① 教師の教科の教養（学問・芸術）が欠如している。＝教科書しか教えられない。
- ② ジャンプの課題を、その学年の教育内容の範囲内で探している。
- ③ 「3分の1は正解にいたらなくてよい」という認識が欠如している。あるいは、それが「怖い」。
- ④ ジャンプの課題を<難しい課題>と誤解している。
- ⑤ 正しいジャンプの課題は一つしかないと誤解している。

この中で、特に本校の教員が陥っている要因として、④、⑤があげられる。そこで、もう一度、「発達の最近接領域（ZPD）」内にジャンプの課題を設定することを全教員で理解し、ジャンプの課題づくりに取り組んだ。

特に⑤においては、同じ内容の授業でも、クラスが変われば、生徒の理解の状況が変わるため、複数のジャンプの課題を用意することによって、授業中での生徒の状況に応じて、課題を提示でき生徒の活動が活性化することが多くなったとの感想が教員から得られた。

<複数のジャンプの課題の例>

教科	共有の課題	ジャンプの課題
国語	・単語カードをなかま分けしよう	・なかま分けの理由を説明しよう ・身の回りの言葉をなかま分けしよう
数学	・平行線と面積の関係をマスターしよう	・面積が等しい図形を見つけよう ・面積が等しくなるようにチョコレートを分けよう
社会	・東北地方の三大祭りの特徴は何か	・なぜ東北三大祭りに多くの観光客が集まるか説明しよう ・東北三大祭りの観光パンフレットを作ろう
理科	・光の反射の道筋を作図しよう	・鏡にうつる物体はなぜ鏡の奥にあるようにみえるのか説明しよう ・全身をうつす鏡の大きさを求めよう
英語	・英語で道案内しよう	・道案内マスターになろう ・英語で駅から中学校までのルートを書いたパンフレットを作ろう

◆学び合う意欲を高める授業デザインの工夫

2 (生徒質問紙) 授業の内容がどの程度分かりますか。

指標 「④分からないことが多い+⑤ほとんど分からない」の合計



指標の達成に向けた実践

学習意欲をさらに高め、深い学びへつながるジャンプの課題(活用)づくり

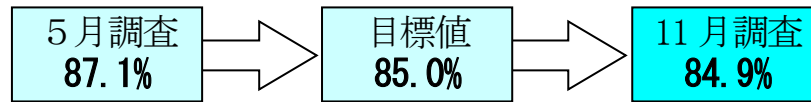
ジャンプの課題は、先に述べた「発達の最近接領域」内に設定するが、この「発達の最近接領域」内の学習は「深い学び」へとつながるものと考えた。そこで、國學院大学の田村学教授の『「深い学び」の定義：「知識・技能」が関連づいて構造化されたり身体化されたりして高度化し、駆動する状態に向かうこと』に基づき、知識がつながる5つのタイプの「どのタイプの知識のつながりを目指したいか？」を明確にした上でジャンプの課題を設定した。有効であったと考えられる例を下に示す。

<p>ネットワーク型Ⅰ-宣言的な知識がつながるタイプ (知識・技能等)</p> <p><家庭> (共有の課題) 幼児にとって遊びとは? (ジャンプの課題) 遊びによってどのような力が身につくのだろうか?</p>	<p>・ネットワーク型Ⅰ</p>
<p>ネットワーク型Ⅱ-宣言的な知識がつながるタイプ (知識・技能等)</p> <p><理科> (共有の課題) 火成岩のでき方とつくりを知ろう (ジャンプの課題) 火成岩を分類しよう</p>	<p>・ネットワーク型Ⅱ</p>
<p>パターン型-手続き的な知識がつながるタイプ (知識・技能等)</p> <p><保健体育> (共有の課題) 基本のステップを踊ろう (ジャンプの課題) スムーズなパートナーチェンジをマスターしよう</p>	<p>・パターン型</p>
<p>知識が場面とつながるタイプ (思考力・判断力・表現力等)</p> <p><社会> (共有の課題) 中国・四国地方の交通機関はどのように発達・変化してきたか? (ジャンプの課題) 四国に新幹線は必要か?</p>	
<p>知識が目的や価値、手応えとつながるタイプ(学びに向かう力・人間性等)</p> <p><音楽> (共有の課題) 音楽と絵画の関連を知ろう (ジャンプの課題) 他の曲で「絵」をイメージしよう</p>	

◆学び合う意欲を高める授業デザインの工夫

3 (生徒質問紙) 分からないところを友だちに聞けますか。

指標 「①はい+②どちらかというとはい」の合計



指標の達成に向けた実践

コの字型の座席配置が生きる授業展開の工夫

コの字型の授業座席配置は、互いに生徒が学び合うための座席配置であり、講義形式の一斉授業を行うには、教師の話を聞きづらい、黒板が見えづらい、板書をノートに写しづらいなどのデメリットがある。これらは生徒が主体的に学ぼうとする意欲を阻害する。よって授業の目的や展開によって、座席配置を変化させることは当然のことと言える。しかし、アクティブ・ラーニングを考えた際、コの字は有効である。逆に言えば、アクティブ・ラーニングを行うためにも、コの字の座席配置が生きる授業展開を考える必要がある。そこで、コの字型の座席配置を生かした授業展開の実践を行った。

<コの字型の座席配置を生かした授業展開の実践例>

(1)国語 「平家物語」

黒板に貼るイラストや旗・弓・扇などの小道具も使いながら、「扇の的」の物語を源氏と平氏のそれぞれの動きを再現する。



- ・登場人物の動きやストーリーをイメージしやすく、古典のストーリーを具体的に理解できた。
- ・古典を暗唱するとき、完全に覚えきれていない生徒も友達の口の動きを見て思い出すこともできた。また、暗唱の時に「目の前の人がきちんと言えているかどうかチェックしてみて。」と言って様子を見せることで、お互いに緊張感をもって暗唱練習に取り組むことができた。

(2)美術 「仏像の鑑賞」

コの字の中心に教師が入って行って実物教材である仏像を見せたとき、教師が実物を少しずつ提示する。



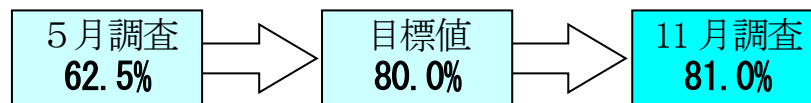
- ・実物がコの字の中心あることで実物と生徒との距離も近く、効果的に生徒の気持ちを引き上げることができた。
- ・生徒がお互いに顔が見えるので、発表する生徒に注目しやすく、級友の話を聞きやすくなっていた。

この他にも、スピーチをするとき、テーマに沿って自分の考えを英語で述べるとき、ディベートをするときなど、自分やグループの考えをクラス全体に発表し合う授業では、お互いの顔が見えるので、コの字の座席配置はとても効果的であった。学級活動や総合学習などで自分の考えを発表し合う授業の時には、黒板の前に移動しなくても、自分の座席で立つだけで全員の顔が見える位置で発表できるというメリットを感じた。

◆授業改善を教師自らが積極的にを行うための意欲と資質の向上をめざした研修のあり方

4 (教師質問紙) 話し合い活動をよく行っている。

指標 「①はい+②どちらかと言うとはい」の合計



指標の達成に向けた実践

本校では、平成26年度から、協同学習に取り組んでいるが、毎年の教員の異動、新採教員の増加等で、初めて協同学習に取り組む教員が多い。そのため、本校で協同学習を行う理由、次の4つの研修で、協同学習のメリット等の共通理解を行い、教員の授業力向上と授業改善の意欲向上を図っている。

A 【学校課題研修】～ なぜ、本校生徒にとって進路保障が重要なのか等、学校課題を理解する研修

毎年、4月の職員会後の現職教育の場で行う。本校の生徒の現状を知ってもらうとともに、進路を保障する必要性を感じてもらう。本校では「人権」を中心にスローガンを「なかまづくり⇔自分づくり」として様々な教育活動を行っており、協同学習が教育活動を支える中心的な取組であることを全職員が理解する。

B 【スタートアップ研修】～ 協同学習の基本を学ぶ導入研修で、共通実践の内容を申し合わせる研修

Aの研修後、第2回の現職教育の場で行う。本校が協同学習を行うようになった経緯や、協同学習を行う目的を、新しく赴任してきた教員に理解してもらうと同時に本校で経験してきた教員の再認識を図る。また、協同学習を行っていくことで、どのような授業を展開していくか等を、本校で経験してきた教員が新しく赴任してきた教員に伝えていく場としている。

C 【生徒理解研修】～ 生徒がどのような課題をもっているのか等、個々の生徒の現状を知る研修

毎月の職員会の中で行う。日々変化しながら成長していく生徒の実態を、全職員が把握するとともに、生徒の実態を踏まえた授業の在り方を検討する。

D 【公開授業研修】～ 全員、年4回、授業公開や相互参観を実施し、授業力の向上を図る研修

5月、6月、11月、1月に実施し、午前中は全授業の公開、午後は研究授業・研究討議を行う。公開授業は全職員が授業を行うよう時間割を調整し、全職員が授業プランを作成する。

研究討議では、教科を越えて意見交換ができるように、本校の教員を生徒の各グループに割り当て、「ここで、〇〇さんは気づいたようだ。」「〇〇さんの□□という言葉で、グループの話し合いが活性化した。」「自分の授業では、意欲的な面が見られない〇〇さんが、とても積極的に話し合いに参加していた。なにが、〇〇さんを意欲的にさせたのか?」というように、グループ活動中の生徒のつぶやきを取り上げたり、授業内での個々の生徒の変容を観察したりする。

また、校区内の小学校の教員、県内の中学校の教員も参加して、意見交換を行い、最後に、定期的に県外から招いているアドバイザーから他の公開授業も含めて、本校の取組について指導・助言をいただいている。

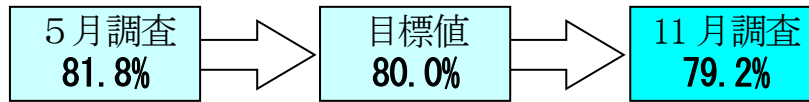


公開授業・研修会のようなす

◆協同的な学びを念頭においた家庭学習のあり方

5 (生徒質問紙) 去年と比べて力が身についていますか。

指標 「①はい+②どちらかと言うとはい」の合計



6 (教師質問紙) 生徒は学力が身につけてきている。

指標 「①はい+②どちらかと言うとはい」の合計



指標の達成に向けた実践

学習の手引きの作成・配布

学習内容が増えるにつれて、また学年を進むごとに学習内容がより高度になるために、学力の伸びを実感することが難しい生徒も少なくない。生徒が自身の学力の伸びを実感するためには、授業ごとに振り返りの場をもち、「何が分かったか、何ができるようになったか」を確認させることが大切であるとともに、その学習内容を定着させ、継続して使える力に変えていかなければならないと考える。また、このような力が、さらに話し合い学習の場において、自分の意見に自信をもって発言できる原動力となり、さらに協同学習を活性化させて行く原動力になると考えられる。そのためにも、家庭学習は重要である。

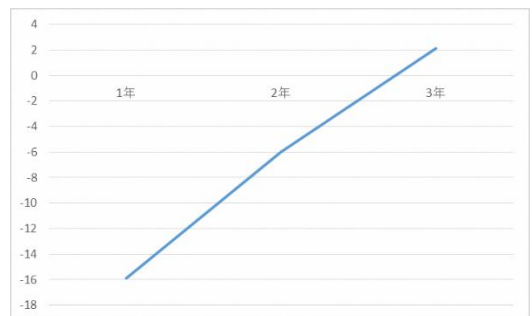
学習の手引き

そこで、まず、何をどのように家庭で学習すればよいかを生徒に伝えるために、本年度は昨年度より作成していた「学習の手引き」を見直し、4月に全校生徒に配布した。

IV 研究の成果と課題

◆学習意欲の向上

「授業に興味をもって参加できていますか」というアンケートの質問に対して、5月の結果は73.3%であったが、11月の結果は66.4%と6.9%の減少が見られた。年度当初の生徒が緊張感や、やる気がある5月に対して、授業が難しくなり、中だるみが見られる11月では結果が低くなるのは予想がついていることではあった。しかし、この結果を学年別にみると、1年生で-15.9%、2年生では-6.0%という結果に対して3年生では+2.1%という結果であった。このことは、本研究を継続することにより、学習意欲の向上が期待できることを示し、一定の研究の成果を得たといえるのではないかと考える。



「授業に興味をもって参加できていますか」質問に対する5月と11月の学年別の変化

◆学び合う意欲を高める授業デザインの工夫

例年、教員が難しいと感じているジャンプの課題であるが、本年度は、「基礎概念を習得できるジャンプの課題」、「学習意欲をさらに高め、深い学びへつながるジャンプの課題」というように設定の目的を明らかにすることで、課題を設定しやすく感じた教員もいた。教員のアンケートで「2回に1回はジャンプの課題までいけるか？」の問いに対して5月は「はい」と答えた教師が0%、「どちらかと言うとはい」と答えた教師が25%であったのに対して、11月では、「はい」と答えた教師が5.4%、「どちらかと言うとはい」と答えた教師が24.3%となり、若干増えたのもその成果ではないかと考える。

◆授業改善を教師自らが積極的に行うための意欲と資質の向上をめざした研修のあり方

教員研修においては、過去の積み重ねを生かしつつ、効果がある研修が行えていると感じる。生徒のアンケートで「話し合い活動をよく行っているか」、「普段の学習で発表する機会は与えられていますか」、「授業の最初に今日は何をやるのかがわかりますか」等の質問に肯定的に回答している生徒は85%を超えており、教職員の授業力の向上や授業改善に取り組む意欲の向上が感じられる。

特に、年4回の公開授業は、

授業プラン (P) → 公開授業 (D) → 研究討議 (C) → 普段の授業実践 (A)

の場となっており、効果的な研修の場になっていると言える。

ただ、新しく赴任し、協同学習の経験のない教員にとっては、慣れるまでに時間がかかり、実力を十分に発揮できない現状がある。教員の実力をよりスムーズに発揮できる研修の在り方については今後の課題と言える。

◆協同的な学びを念頭においた家庭学習のあり方

「学習の手引き」の配布により、生徒は「何をすればよいか」は理解できているようである。2年生の県の学習状況調査では、1年生の時と比べて、改善が見られた。これは、先に述べた授業に興味をもって参加している生徒の減少率が低く、学習意欲の継続と手引きの活用がもたらした成果であると考えられる。

しかし、全国学力・学習状況調査や県の学習状況調査の質問紙の結果から、どの学年においても家庭での学習時間は全国や県に比べて低い傾向にある。これに対しては、まだまだ個々の生徒が将来の見通しが十分にもてていないことが原因と考えられる。次年度以降、さらにアンケート調査等で原因を明らかにしていきたい。

11月の研究会の場で、本校の協同学習のアドバイザーである稲葉先生に、「次時の話し合いの内容を予習させておくと、話し合い学習が活性化する。」というご指導をいただいた。今後、さらに本校の協同学習を活性化させ、より生徒に、授業が楽しい、もっと学びたいという意欲を持たせるためにも、「話し合いの内容の予習」をいかにさせるかが今後の課題と考えている。

◆カリキュラムシート（仮称）の作成

本校の生徒は、得意な教科には意欲をもって取り組むが、苦手な教科に対しては初めからあきらめてしまっている生徒が少なくない。あきらめてしまっている教科の学力と、得意な教科の学力の差は開く一方である。これでは、学習意欲の向上が学力の向上に結び付かないと考えた。

そこで、生徒が苦手（嫌い）意識をもっている教科や、学習内容が、自分が得意（好き）とする教科や学習内容と結びついていることを知ることで、今まで、苦手で意欲を感じなかった学習内容を違った視点から見ることができたり、得意なものをつなげたりして苦手な学習内容を克服できるのではないかと考えている。

本年度は現職教育の場で、各教員が自分の担当教科と他の教科の学習内容とのつながりを洗い出し、教科をこえた学習内容のつながりがわかる「カリキュラムシート（仮称）」を作成している。このシートが「学習の手引き」の補助となるとともに、教師にとっても授業改善の資料や、教材研究の時間削減につながるものになってほしいと考えている。